

2020 年度横浜ナザレン教会 待降節第四主日・降誕祭礼拝説教

「クリスマスの呼びかけ」

ルカ福音書第二章 1 節から 21 節

【聖書】

ルカによる福音書 2 : 1 そのころ、皇帝アウグストゥスから全領土の住民に、登録をせよとの勅令が出た。2 これは、キリニウスがシリア州の総督であったときに行われた最初の住民登録である。3 人々は皆、登録するためにおのこの自分の町へ旅立った。4 ヨセフもダビデの家に属し、その血筋であったので、ガリラヤの町ナザレから、ユダヤのベツレヘムというダビデの町へ上って行った。5 身ごもっていた、いいなずけのマリアと一緒に登録するためである。6 ところが、彼らがベツレヘムにいるうちに、マリアは月が満ちて、7 初めての子を産み、布にくるんで飼い葉桶に寝かせた。宿屋には彼らの泊まる場所がなかったからである。

8 その地方で羊飼いたちが野宿をしながら、夜通し羊の群れの番をしていた。9 すると、主の天使が近づき、主の栄光が周りを照らしたので、彼らは非常に恐れた。10 天使は言った。「恐れるな。わたしは、民全体に与えられる大きな喜びを告げる。11 今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである。12 あなたがたは、布にくるまって飼い葉桶の中に寝ている乳飲み子を見つけるであろう。これがあなたがたへのしるしである。」13 すると、突然、この天使に天の大軍が加わり、神を賛美して言った。14 「いと高きところには栄光、神にあれ、／地には平和、御心に適う人にあれ。」15 天使たちが離れて天に去ったとき、羊飼いたちは、「さあ、ベツレヘムへ行こう。主が知らせてくださったその出来事を見ようではないか」と話し合った。16 そして急いで行って、マリアとヨセフ、また飼い葉桶に寝かせてある乳飲み子を探し当てた。17 その光景を見て、羊飼いたちは、この幼子について天使が話してくれたことを人々に知らせた。18 聞いた者は皆、羊飼いたちの話をも不思議に思った。19 しかし、マリアはこれらの出来事をすべて心に納めて、思い巡らしていた。20 羊飼いたちは、見聞きしたことがすべて天使の話したとおりにだったので、神をあがめ、賛美しながら帰って行った。

21 八日たって割礼の日を迎えたとき、幼子はイエスと名付けられた。これは、胎内に宿る前に天使から示された名である。

1 分断された世界の闇

今年のクリスマスは異例の事態です。新型コロナの感染者数が激増しており、重症者も多く、医療崩壊の一步手前だと報道されています。崩壊しているのは医療だけではない、自死者は増えているし、年度末になれば非正規雇用で働く

方々の中で、雇い止めになる人々は、増えてくるでしょう。ホームレス支援をしている方々が、今年は若い人たちが食事支援に現れるようになった。炊き出しの行列に、スマホで音楽聴きながら若い人が並ぶのは今までにない光景だ、と語っていました。歯止めがきかない超少子高齢化による人口減で縮小社会となった状況に政治や経済の仕組みがついていけないままに弱体化した日本。そこに新型コロナウイルスが襲いかかっています。社会的弱者がますます生きる事が難しくなっているのに、強い者にのみ都合のよい「自己責任論」が声高に叫ばれる。叫んでいる方だって、いつ弱者側になるか分からないのに。何十年も静かに衰退していつている、何も新しい事は始まらない、息苦しいほどの閉塞感が覆っています。そんな中、SNS などによって様々なフェイクニュースがまことしやかに広がっていき、私達は自分達の耳に心地よい話ししか聞かなくなっています。外国にルーツを持つ人々を排斥する人権侵害が、ネット社会ではまかり通り現実の政治家の中にさえ、差別と分断を助長する人々が現れています。今年の東京都知事選ではヘイトスピーチを選挙演説として行った候補がかなりの票を集めました。今や、思想信条が異なる人々の間では、現実認識でさえ大きく異なる事態となっています。日本だけではなく。アメリカ大統領選挙は、トランプ大統領が7000万票以上集め、この超大国の分断の深刻さを世界に見せつけました。人間の深い闇に囲まれた閉塞感と分断の中で2020年は終わろうとしています。しかし、深い闇の中であるからこそ、私達はクリスマスの力強い招きの言葉を聞きます。「**恐れるな。**」それがクリスマスの夜、人々が聞いた最初のメッセージでした。

2 まことの救い主の誕生

今の世界を覆う闇は、約2000年前の世界も取り囲んでいました。イエス様がお生まれになった頃、皇帝アウグストゥス勅令によって人口調査が始まりました。聖書では他にも人口調査が出てきます。旧約聖書の列王記には、栄光のダビデ王がイスラエルの人口を調べた為に神の怒りを買って、エルサレムの人々が疫病に倒れたとあります。イスラエルの民は神のもの。神の民です。王も神によって立てられ、神に委ねられて国を治めている神の僕に過ぎません。王の為に税金を取り立てたり兵士として徴収する為に行う人口調査は、神のものである民を人間である王の所有とすることであり、主なる神が厭う事であると聖書は語るのです。そして、約2000年前も、神が憎まれる人口調査が、今度は、外国の支配者、自分こそ神だと名乗るローマ皇帝アウグストゥスの勅令で行われています。

熱心な信仰者は激昂して立ち上がり、反乱が頻発しました。ローマ帝国に反旗を翻す指導者達の多くは、「われこそは、神の民が数百年待ち続けた救い主、

メシアだ」と主張していました。武力による民族解放こそが神の国をこの地上に出現させる事であり、武装蜂起を主導する自分こそ、救い主だというのです。一方のローマ帝国、その頂点にあるローマ初代皇帝・アウグストゥスもまた人々から「救い主」と呼ばれていました。武力によって地中海世界を統一し、いわゆるローマの平和を実現したアウグストゥスは、神として当時の地中海世界に君臨していました。ローマ帝国皇帝、反乱の指導者、どちらも「我こそは救い主」と主張していた、そしてその決着を力をつけていました。アウグストゥスの人口調査は、ガリラヤ地方のナザレの人々の所にもやってきます。ヨセフもマリアも、ヨセフの祖先の町、現代日本で言えば本籍地であるベツレヘムへと旅をします。当時の旅は命懸けな上にマリアは身重です。貧しい彼らには大きな試練であったでしょう。征服され支配される側の人々にとって、アウグストゥスは救い主どころか神の民を蹂躪する暴君でありました。また、反乱指導者も、庶民にとっては彼らの武装蜂起により、ローマ帝国の庶民への監視が厳しくなるのですから、とても救い主とは言えません。

ですが、ここに人口調査の対象にもならない人々がいました。人とは数えられない地の民、羊飼達です。彼らは定住地を持たない人々、安息日も守れないからでしょうか、人々から差別され、共同体から切り離された不便な暮らしを強いられていたようです。当時のユダヤ人の間で、「羊飼い」とは、「嘘つき」の代名詞となるほどに偏見を持たれ、嫌われていました。ローマ帝国に差別迫害されていたユダヤの人々が、自分たちとは違う生活スタイルの人間を色眼鏡で見て差別する、そうする事で自分たちの優越感を満足させる。そして、差別された人々の中には自暴自棄になって罪過ちを犯す、それがますます差別をうむ。現代世界にもそこかしこで見られる事です。ローマ皇帝から羊飼まで、分断された人々がそれぞれのコロニーを作って閉じこもりながら、自分たちだけの事を考えて生きる世界。その日だけの命を繋いで生きる世界。人間が作り出す社会の本質は、何千年前から何も変わらないのだと、クリスマスの物語は私達に語ってくれています。私達人間が作る闇こそ、私達自身を分断しています。自分たちでは吹き払う事が難しい闇です。

そんな情けないほどどうにもならない私達人間の世界に、神の御子が人間となってやってきてくださいました。どこにやってきてくださったのか。父親が誰とも分からない形でまだ若いマリアの胎内に、そして家畜用の飼い葉桶の中に人間となりました。世界帝国の首都ローマの壮麗な皇帝の宮殿でも、エルサレム神殿でもヘロデ大王の宮殿でもない、小さな山あいの町、ベツレヘムの家畜用の飼い葉桶の中。世界を造られたまことの御神は、権力者や世間がいと也容易く「お前たちは不要だ」と切り捨てる人々の所にこそ来てくださいました。「神の独り子は、私達の弱さのただ中に分けいってください」と語ったのは、

古代最大の教父、アウグスティヌスです。まことにその通りだと思います。

3 主の栄光

救い主誕生の知らせを、最初に受けたのは、先ほど申し上げた人の数にも数えられないような羊飼いたちです。偏見によって差別され分断された人々の傍らに御使いが現れます。そのとき、「主なる神の栄光が辺りを照らした」と聖書は語ります。主なる神の栄光とは、私達人間の中にある影、大きな闇をうむような影など微塵もない、完璧な栄光。この栄光が輝き渡って、クリスマスのメッセージが告げられます。「恐れるな。わたしは、民全体に与えられる大きな喜びを告げる。今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである。あなたがたは、布にくるまって飼料桶の中に寝ている乳飲み子を見つけるであろう。これがあなたがたへのしるしである。」そして天が開け、待っていましたとばかり天使の大軍が加わって天地を轟かせて賛美します。「いと高きところには栄光、神にあれ、／地には平和、御心に適う人にあれ。」

「いと高きところの栄光、天の栄光」について、ある神学者がこう言いました。「神の栄光は、地上に生きる私達ひとりひとりの人生を、神の臨在で満たしてください。そして、私達の人生をほんものの人生としてくださる栄光だ。」私もその通りだと思います。この神の栄光のもとでは、足りないものは何もなくなり、小さい者、ひとりぼっちのものもなく、全体を独占するものもありません。強い人、大きい人々のその影で、小さい人々が踏みつけにされるのではないかと心配するような事もなく、誰もが、どれほど見栄えなく小さな存在であっても、自分の人生を真実に生きる事ができる栄光です。神の栄光のもとでは、人々を隔てる壁は崩れ去り共感が生まれる。この神の栄光が、クリスマスの夜、人類の歴史の中に突入し、「人類の歴史の終わり」が始まりました。そして、終わりの成就に向けて歩み始めました。終わりの成就の時の様子が、ヨハネの黙示録の21章に描かれています。「見よ、神の幕屋が人の間にあつて、神が人と共に住み、人は神の民となる。神は自ら人と共にいる。」「御使いが示した都は神の栄光に輝いていた。…そこには夜がない。都を照らす太陽も月も必要ではない。神の栄光が都を照らしているからである。」(黙示録 21:3,11,22-24) 今も、私達は、終わりの始まりのクリスマスから、終わりの成就の時に向けて歩み続けています。

しかし、私達人間には、それが中々分かりません。分からないから、この地上を人間の栄光で満たさねばならないと考え、人間の栄光を追い求めます。ですが、それは必ず失望に終わる、人類の歴史はそう我々に教えてくれているようです。革命を起こしたとしても、弱者が強者となり弱い人々を踏みつける構

図は変わりはありません。人間の栄光は深い闇を内に孕む栄光です。私達は被造物です、儂く滅ぶより他ない存在に過ぎません。人間が自分を超えて生きておられる神を知り、その栄光を知りそれに預かる事によって、人間もまた栄光あるものとなり、神が造られた人間にふさわしい栄光に至るのだと思います。

4 突破の呼びかけ

さて、ドイツの有名な説教者、ヘルムート・ゴルヴィツァーは、降誕祭の説教で「聖書全体の関連で見れば、降誕祭とは、突破への呼びかけだ、冒険への招きだ」と語りました。私も本当にそうだと思います。何よりも先ず、神の独り子、神の身分と等しい方が、ご自身のあり方を突き破って、若く貧しい女のもとに私生児として飼い葉桶へと生まれてくださったのです。これ以上の冒険はありません。クリスマスとは、神の御子の冒険の始まりなのです。

そして、クリスマスの出来事は、私達に自分のあり方を突き破る冒険へと私達を招いています。今までの自分だけ、自分たちだけの場所から踏み出て、救い主のもとに向かいなさい、神の栄光のもとで生きなさい…と招いているのです。クリスマスの招きに答え、救い主のもとに赴く事で、私達はどう変えられるのでしょうか。

第一に確かな希望を得ることができるのだと思います。私達は、人間の儂い栄光を追い求めて生きている中で、度々、失望に襲われます。そして、心が萎えていき、自分がよくなる事もないし、変わる事もない、自分の周りも本質的には何も変化せず、全世界がよくなるなんて幻想でしかないと諦めてしまいます。しかし、救い主のもとで自分の人生を見ると、その諦めが取り除かれ、希望が生まれます。なぜなら、救い主はすでにこられていますし、今も生きて働いておられる事が分かるからです。パウロはこの事を次のように述べています。

「主による希望は私達を裏切る事はありません。私達に与えられる聖霊によって神の愛が私達に注がれるから」だから、クリスマスは、私達に次のように希望を告げるのです。「神の独り子が、はるばる天の彼方からこの地上へと来てくださった。この私を新しくしてくださる為に、この世界をも新しくしてくださる為に」罪ある儂い自分たちに希望を抱く事は難しい、しかし、この救い主にこそ、確かな希望があります。

そして、救い主のもとで起こる事の二つ目は、自分を義とすることから、私達を解放します。他人が悪いのだ、自分以外人間がもう少しましであったら！私は最善を尽くしており、私の考えることが最善なのだ！そう思いこもうとする私達。しかし、馬小屋に生まれた方は、私たちすべての者の罪のために十字架につけられる方です。だからこそ、神の御子の降誕、クリスマスは、私達に語ります。「私達全ての者が、この世界の闇に共同の罪がある」と。飼い葉桶か

ら始まり十字架へと歩まれた救い主の姿をよく見つめる事こそ、自己正当化の罪から私達を解き放ち、謙遜な者とするのです。時に傲慢となり、時には卑屈となる私達の為に来てくださり十字架にかかって下さる救い主の慈しみを知り、忍耐深く人の言葉にも耳を傾ける者とするのです。

そしてクリスマスの出来事は、私達の安易な生き方を方向転換させてくださいます。自分のあり方を変える勇気を与えてくれるのです。自分のためだけに生き、自分の領域から踏み出さず、ながいものには巻かれて生きる…という安易な生き方ではない、むしろ、真理を求め、人を愛し自分を愛し神を愛する者へと私達を向かわせます。なぜなら、十字架につけられた方は三日目に永遠の命へと甦られた方、そして神の右に昇り、今もそこにおられる方だからです。パウロはこうっています。「いまやあなたたちはキリストと共に蘇ったのだから、高みのものを、神の右の座にざしておられるキリストのいますかの処を求めなさい」(コロサイ3:1)クリスマスは私達に変わる勇気を与えてくれます。困難に飛び込む勇気、正義のために戦う勇気、新しいもの、まだ身についていないものを求める勇気、古い自分のあり方に固執しない勇気です。

だから、救い主のもとへと赴く事で、まことの喜びが与えられます。今日、多くの人間が、多くのキリスト者さえもが、喜びのない心のせいで苦しみ、他人を非難し、臆病になっています。まるで愛する神が、死んでしまったかのようにです。しかし、救い主のもとでは、神が生きて働いておられる事が分かる、だから、喜びのない心に、消しがたい喜びが生まれます。神が究極まで小さくなる、暗闇に覆われた世界をそこまで愛してくださるといふ喜びです。悲しみと不安のただ中であって私達を慰める喜び、罪のただ中にあり、自分の不確かな正義にしがみつくのではなく、自分の罪を言い表して、神に変えていただく喜び。罪ある世界でなおも微笑むことができる喜び、私達を隣人に対して喜びの人としてくれる喜びです。全ての人間に対して友情を抱かせてくれる喜びです。パウロは「主にあって常に喜んでいなさい。重ねて言います。喜びなさい。」と言っていますが、それは、常にその胸に救い主を迎えなさい、という意味なのです。今日、降誕祭の招きを私達が聞き、明日も、またいつの日にも、これを耳のなかで聴き続けるならば、わたしたちにこの降誕祭のメッセージが伝えてくれるのは、まさに喜びの心だと思います。クリスマスのメッセージは、招きであると同時に、天の父なる御神の約束でもあるからです。

人々に差別され、自分たちの中に堅く閉じこもり身を縮めて諦めの内に生きていた羊飼いたちも、飼い葉桶で眠る救い主のもとに向かい、神の救いを経験して、変えられました。神の栄光に与る希望を与えられ、卑屈から解放され、救い主を礼拝して謙り、人々に証する勇気を与えられ、大いに喜ぶ者、隣人に喜びを伝える者と変えられました。先ほど、アウグスティヌスの「主イエスは私

達の弱さの中にわけ行ってください」という言葉を紹介しました。あの言葉には続きがあります。「そして、神の力で私達を造り変えてくださる。」いと高き所の栄光が、地へとやってきて、私達をみ心に叶う者へとつくりかえてくださるのです。

カールバルトやトゥルナイゼンの魂の指導者と言われたクリストファー・ブルームハルト牧師は、次のようにいっています。「イエスは、神の誓いです。私はあなた方に、この方と共に保証します。世界は滅んではいません。真実の人間として生きることができるようになるのです。あなた方が殆ど絶望しているまさにそのところ、あなたがたの肉の内において、光はさし始めたのですから。」

5 救い主のおられる処へ

では、2020年のクリスマス、果たして救い主イエス・キリストは、どこにおられるでしょうか。確かに言えることは、暖かい暖炉の前にも、煌びやかに飾り付けられたクリスマスツリーの傍らにも、主はいない…ということです。今日も差別され排斥され小さくされ悲しむ人々の所に、人生の試練に苦しむ人のそばに、希望を失い孤独の涙を流す人々の傍らに、病に苦しむ人のベッドの下に、キリスト・イエスは寄り添っておられるのだと思います。飼葉桶は、人間の闇の中に沈むそこかしこにあります。そして、そこから、主イエスが私達を招いておられます。それぞれの場所を出て、私のそばにおいで、私のそばこそ、あなた方の命がまことに輝く神の栄光が満ちている、と。私達がそれぞれの場所を出て救い主のもとへと恐れずに一歩踏み出す事を待っておられます。

神の御子が人となってくださいました。既に光が差し始めているのですから、それは今後ますます高く昇り、ついには全世界を照らします。来る一年、私達の日々が、クリスマスの招きに答え、終わりの日を仰ぎ待ちつつ、主のもとに急ぐ歩みでありますように、祈り願っています。